

副詞「ずっと」の歴史的変遷

遠藤 小春

文19-0094 国語国文学専修 国語学コース 4年

<目次>

1. はじめに
2. 関連語
3. 「ずっと」のタイプ
4. 平安-江戸の用例
5. 明治-昭和の用例
6. 「ずっと」の意味変遷
7. まとめ

1. はじめに

「ずっと」（『日本国語大辞典』）

- ◎ 「彼よりずっと英語がうまい。」 <程度>
- ◎ 「彼はずっと走っている。」 <時間>
- ◎ 「一室の中へずっと入る。」 <推し進める> ?

➡ 現代語「ずっと」は<推し進める>で用いられない。
意味変化があると思われるため、変遷をCHJで調査した。

2. 関連語

「ずっと」は「ずっ」を語素とするオノマトペを由来としている。
オノマトペは一つの語素から多くの派生語をうむため、「ずっ
と」の派生語まで含んで調査する必要がある。

「<ザ行・サ行・ダ行・タ行> + と」の形で、促音・撥音・音便
のない形をそれぞれ調査し、

「つと」、「つっと」、「ずんと」に調査対象を絞った。

3. 「ずっと」のタイプ

用例調査より、「ずっと」と関連語には以下のタイプがあった。
用例をこれらに分類し、時代別コーパスごとの用例数を調査する。

A [短い移動]	「 <u>ずっと</u> 立って」 (長町女腹切・51-近松 1712_09001,25820)	
B [長い移動]	「 <u>ズーツ</u> と二人で何處かへ行つちまはう」 (太陽・60M太陽1909_02027, 122170)	
C [隔たり]	「 <u>ズツト</u> 遙かに遠くなり」 (女学雑誌・60M女雑1894_28003, 14220)	
D-1 [時間]	} 長く続く	「 <u>ズツト</u> 粹を通し顔である」 (浮雲・60N浮雲1887_11003, 50600)
D-2 [空間]		「長屋が <u>ズツ</u> と向横街まで續いて」 (太陽・60M太陽1909_02027, 14250)
E [範囲全てに行為が及ぶ]	「 <u>ズツト</u> 読み下して絶句一首を教へて貰つた」 (太陽・60M太陽1901_0103, 23440)	
F [出現・接触]	「 <u>つ</u> と舳の方に顯れたる船長は」 (太陽・60M太陽1895_01018, 63180) 「 <u>つ</u> と握ってしまった」 (腕くらべ・60N腕く 1916_11010, 35950)	

4. 平安-江戸の用例

※CHJは室町-狂言から江戸-近松の用例まで約60年の開きがあるため、その間の用例として「狂言記」を調査した。『狂言記正編(1660年刊)』、『狂言記外五十番(1700年刊)』、『続狂言記(1700年刊)』、『狂言記拾遺(1730年刊)』の4種類を合計し、江戸-近松の用例とともに「江戸前期」に用例数をまとめた。

「つと」

	A	B	C	D-1	D-2	E	F
平安	2	0	0	0	0	0	0
鎌倉	13	0	0	0	0	0	0
室町-キリシタン	0	0	0	0	0	0	0
室町-狂言	2	0	0	0	0	0	0
江戸前期	0	0	0	0	0	0	0
江戸後期	9	0	0	0	0	0	0

「つっと」

	A	B	C	D-1	D-2	E	F
平安	0	0	0	0	0	0	0
鎌倉	36	0	0	0	0	0	0
室町-キリシタン	12	0	0	0	0	0	0
室町-狂言	3	0	13	4	0	0	0
江戸前期	59	0	2	0	0	0	0
江戸後期	1	0	0	0	0	0	0

「ずんと」

	A	B	C	D-1	D-2	E	F
平安	0	0	0	0	0	0	0
鎌倉	1	0	0	0	0	0	0
室町-キリシタン	0	0	0	0	0	0	0
室町-狂言	0	0	0	0	0	0	0
江戸前期	1	0	1	0	0	0	0
江戸後期	0	0	2	0	0	0	0

「ずっと」

	A	B	C	D-1	D-2	E	F
平安	0	0	0	0	0	0	0
鎌倉	0	0	0	0	0	0	0
室町-キリシタン	0	0	0	0	0	0	0
室町-狂言	0	0	0	0	0	0	0
江戸前期	5	0	1	0	0	0	0
江戸後期	23	2	1	0	0	0	0

4. 平安-江戸の用例

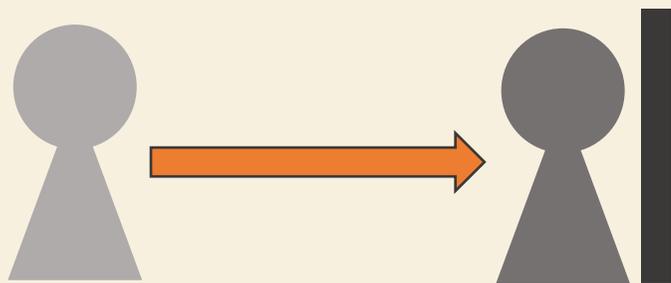
- 「つと」 : 4語中最も早く現れ、A[短い移動]のみで用例がみられる。
- 「ずんと」 : 鎌倉以降、A[短い移動]とC[程度]で現れたが、用例数は少ない。
- 「つっと」 : 鎌倉期にA[短い移動]で現れ、室町以降はC[程度]、D-I[時間]で用例がみられる（下記参照）。
江戸後期以降、用例がほとんどない。
- 「ずっと」 : 江戸期に、A[短い移動]、B[長い移動]、C[程度]で現れる。

? 「つっと」にC[程度]とD-I[時間]がみられるようになるのは?

↳ A[短い移動]の「2点間の移動・差」という基盤があったから。

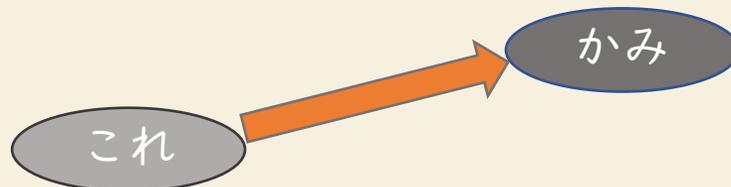
A 「景親、つと寄つて、」

(保元物語・30-保元1223_02002, 39480)



C 「これよりつとかみで御ざる」

(虎明本狂言集・40-虎明1642_01006・10600)



D-I 「うちへつとおりやりはせいで」

(虎明本狂言集・40-虎明1642_07029, 2550)



5. 明治-昭和の用例

「つと」

	A	B	C	D-1	D-2	E	F
1870-1889	3	0	0	0	0	0	0
1890-1909	47	0	0	0	0	0	2
1910-1929	29	0	0	0	0	0	5
1930-1949	9	0	0	0	0	0	0

「つっと」

	A	B	C	D-1	D-2	E	F
1870-1889	0	0	0	0	0	0	0
1890-1909	3	0	0	0	0	0	0
1910-1929	0	0	0	0	0	0	0
1930-1949	1	0	0	0	0	0	0

「ずんと」

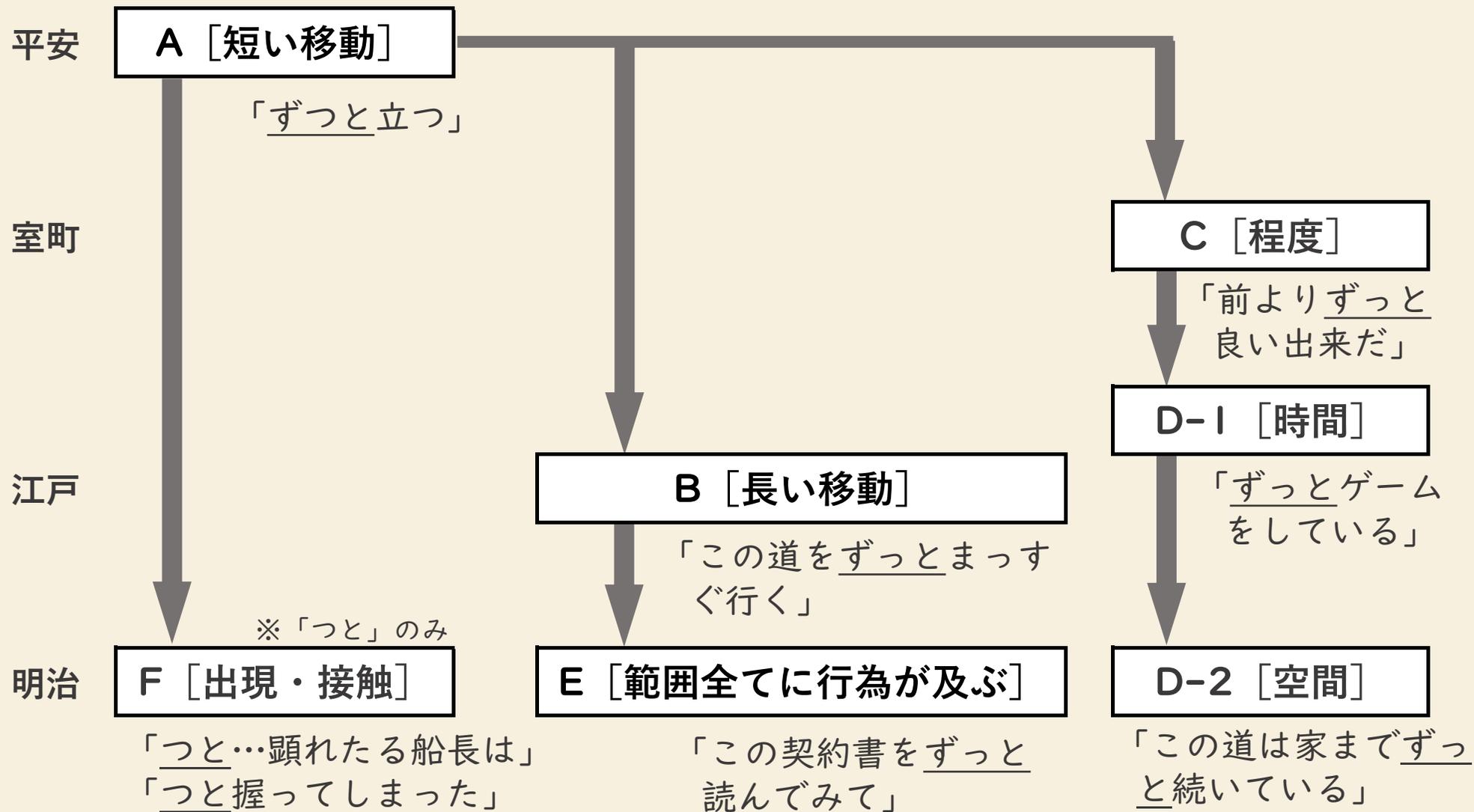
	A	B	C	D-1	D-2	E	F
1870-1889	0	0	0	0	0	0	0
1890-1909	1	0	2	0	0	0	0
1910-1929	0	0	1	0	0	0	0
1930-1949	0	0	0	0	0	0	0

「ずっと」

	A	B	C	D-1	D-2	E	F
1870-1889	5	0	0	1	0	0	0
1890-1909	29	5	84	8	3	7	0
1910-1929	23	6	222	46	10	2	0
1930-1949	6	1	46	10	2	2	0

- 「つっと」、「ずんと」は衰退の一向
- 「つと」 : A[短い移動]の用例が多く、E[出現・接触]もみられるように。
- 「ずっと」 :
 - A[短い移動]、C[程度]に加え、D-1[時間]にも用例がみられ、「つっと」とすべて同じタイプを持つ。 → 「ずっと」は「つっと」の交代
 - D-1[時間]から発展したD-2[空間]がみられるように。
 - 1890年代以降、B[長い移動]、E[範囲全てに行為が及ぶ]も見られるように。 → 行為の範囲を広げている

7. 副詞「ずっと」の意味変遷



8. まとめ

- ① 「ずっと」は、江戸時代後期に「つと」と交代して現れた。
- ② 「ずっと」は、B[長い移動]、E[範囲全てに行為が及ぶ]のタイプを持ち、A[短い移動]よりも**行為が及ぶ範囲を広げていった**。
- ③ すべてのタイプは、2点間の移動という点で、**意味の連続性**がある。

【今後の課題】

- CHJにおける「つと」「ずっと」は、新しい用例でもA[短い移動]として用いられている。しかし、どちらも現代語では用いられず、「つと」は語自体あまりみられない。そのため、BCCWJを用いてCHJ以降の動向を調査する。
- 関連語を増やし、「ずっと」の成立や意味変化を取り巻く語同士の関係を調査する。

【資料】

狂言記[1660]北原保雄・大倉浩(校注)(1983-1985)『狂言記の研究』勉誠社

狂言記外五十番[1700]北原保雄・大倉浩(1997)『狂言記外五十番の研究』勉誠社

続狂言記[1700]北原保雄・小林賢次(1985)『続狂言記の研究』勉誠社

狂言記拾遺[1730]北原保雄・吉見孝夫(1987)『狂言記拾遺の研究』勉誠社

日本語歴史コーパス国立国語研究所(2022) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search> (2022年9月12日確認)

【辞書】

『日本国語大辞典』第2版、小学館、2000-2002年